
俺の主人は貧乏貴族

坂本とも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の主人は貧乏貴族

【Nコード】

N3615BA

【作者名】

坂本とも

【あらすじ】

世間から殺人鬼として恐れられ、恋人さえも手に掛けた少年、三船 空が異世界入りをし、貧乏貴族の娘フィナとその従者リヒトと邂逅する。……する、もフィナの豪放磊落な性格のせいで、奴隷扱いをうける殺人鬼。

理性も道徳も生まれたときに捨ててきたような少年と、万年金欠貧乏貴族のあべこべ主従が奇跡的に出会い、ともに成長していくシリウス？ コメディー？ ラブストーリー？ ……これはそんなおはなし。

※魔法はありますが、主人公は殺しにしか興味がありません。
でも生きるために、いやいやながら学びます。

prologue

ぐちゃ、ぴちゃっ、暗室に響き渡る音源。

そこに目を向ければ、一人の少年が機械的に腕を振り下ろしている。

その振り下ろされた先にあるものは少女の死体。

……いや、ここでは死体だったものと表記すべきだ。

なぜならそれはすでに至るところが欠損し、肉片へと姿を変えつつあるからである。

それはかつて少年の恋人だったもの。

恋人の死体を肉片へと変える作業を無表情で行う少年。

はたから見れば、狂気の沙汰としか思えない行為。

だが、少年の顔にはなんの変化すら見てとれない。

少年の頭を占めるのは、懺悔でも憎しみでも怒りでもはたまた楽しみでもなく、少しばかりの寂寥感である。

そして何度目かはわからないほどその作業が続いた時、少年の動きがピタリと止まった。

ここにきて、初めてその顔に表情が生まれた。

怪訝そうに周りを窺う。

少年は先程から、立ちくらみのような症状に襲われている。

「血のせいかな」

ぼそりと低い声で呟く。

その瞬間、視界が点滅し闇に包まれた。

prologue (後書き)

初っ端なので短め

1日目 異世界は甘くない

異変は突如として起こった。

目を開くと、部屋は一瞬にして木々の生い茂る森へと変わっていた。

「眩しい……？」

思わず目を閉じる。

いや待て待て待て、思い出せ俺は何をしていた？

……記憶があやふやだ。

いや……直前の記憶だけだな、昔のことはおおかた覚えている。

三船 みふね そら 空、十六、男。

うんOK大丈夫。

そして……そして……たしか……

————由佳を……殺した。

理由は……忘れた。

彼女を解体していたら眩暈に襲われここに來た。

たしか今は夜だったはず。そしてあの家には誰もおらず、十月になったばかりで、夜はなかなか涼しく過ごしやすい気候になったばかりだった。

だが……瞳を閉じていてなお、感じるこの光量。
そして肌を焼くような暑さ。周りから聞こえる虫の鳴き声。

「どうなってやがる……？」

だが呟いたところで事態が進行するわけでもなく、汗が身体から噴き出すのを感じた。

目を開ける。

いまのままではまずい。

とりあえず、水分の確保に動かねば。

そこまで思考し歩み始める。

木々で道のないまったくの未開地であるため、解体に使っていた大ぶりのナイフで雑草やツタを刈り取り進む。

俺は色々な物を手に掛けてきた。

例えばハト、例えばイヌ、例えばヒト。ああ、恋人なんてのもあった。

俺のようなやつを世間様は殺人鬼と呼ぶ。だが、俺の本当の目的は殺すことなんかじゃない。

俺はただ消えたかった。つまらないこの世から。

だから出来るだけ存在を希薄に、気配を微弱に近づけた。

だってほら、そこにいるのに認識できないってことはつまるところ、いないのと同じじゃん。

腹の内を隠して笑うことも、人に気をつかうこともせずに済む。
なんて気楽さ。

ならなぜ殺すのか？簡単なことだよ。

あんたらだって旅行先のパンフレットにスタンプを押すだろ？それとおんなじ、記念のために殺すんだ。

ただどいくら頑張って気配を消したところで、人は俺に気付く。

だから徐々にレベルを上げることにした。

ヒトは思いのほか鋭い。ならば小動物ならばどうだ？それさえ無理ならばムシは？

その成果を形に残すため、俺に気がつかなかったものを殺す。

最初は逃げられることもあったが、呼吸音の消し方、足音の消し方、衣擦れの消し方に至るまで、ありとあらゆるものを研究し、今では簡単にヒト程度なら気取られず殺せる。

水の音が聞こえた。

急いで進むとそこには小川が。

ほっとする。水がなければ生物は死んでしまう。

そんな当たり前を今更のように考えた。

だが、気付く。

小川の周囲に見たこともない生物がたむろしている。

大きさは個体差があるが、みな優に二メートルはある。

銀色の毛並みに覆われ、強力な脚力を持つであろう筋肉質な肢体。

狼のようだが、頭には見事な角が三本突き出している。
それが六体。

無理だ。

それを見て思う。あれは人に狩れる代物シロモノじゃない。

ふと、初めて見た生物すら殺せる対象か、見た瞬時に思考する自身に苦笑する。

退こう。この川沿いを降りてゆけば、湖などに出られるかもしれない。

そつと草木を揺らさぬよう慎重に道を引き返す。

この距離ならば、そうは見つかるまい。

そう思っていた、奴らが一斉にこちらに振り返るまでは。

ぞつとして、背を向け駆けだす。

殺される。

「ゼエ、ハアツハアハアツ」

絶え間なく走り続け、ようやく止まる。

というよりも限界だ。足が震え、意識は朦朧としている。
そして後ろから追いかけてくる気配は……ない。

「はあああつつ」

ひと際大きい息を吐く。

助かった。

おそらく奴らが本気で狩りに来ていたら、俺はやられていた。たまたま見逃されただけだろう。

しかし……何故バレた？

俺の気配の消し方は完ぺきだった。完ぺきだったはずだ。

ましてや森の中、最高のフィールドだ、

バレる要素が……ああ、そうかこの臭いか。

「血がべつとり」

解体時に付着した血が服についたままだ。

この血の匂いに惹かれたんだろう。

「ククッ」

ああなるほど、どうやら本当に元いた場所は甘かったらしい。

「運のいいことだ」

今日は本当についている。

面倒な死体処理はしなくていい。命拾いもした。

そしてなにより

———この世界には獲物がたくさんだ。

さあ、ねぐらと水を確保しにまた動くか。

5日目 異世界は腹が減る

ここに来て、はや五日たった。

どうやらここは、人外魔境らしい。

目玉が三つあるフクロウだったり、異様に歯が発達した大ネズミだったり、強靱な糸で巣をつくる巨大なクモだったり。

まったくとんでもない。

だが、収穫もある。

ここは地球の常識のうちに入る。

つまり、火は酸素を使って燃えるし作用反作用も重力だってある。太陽も月も同じ。

時間はわからないが、ここまで地球と似通っているのだからほとんど変わらないだろう。

収穫はそれだけじゃなく、気配を消すのに磨きがかかった。

今じゃ、三つ目フクロウ（勝手に名付けた）を殺せる。

俺もフクロウも気配を消して相手を殺すタイプだが、そちらは俺の専売特許だ。

首が360度回るのには驚いたが、見つけてしまえばどうということはない。

あと、日に日に身体能力が上がっている。

今じゃ木の上から飛び降りて、通り過ぎようとする獲物の首を刎ね

るなんて芸当もできるようになった。

ねぐらは昔、何かが使っていたであろう岩の隙間を再利用させてもらっている。

なぜそんなことが分かるのかと言うと、骸骨君つまり白骨死体が散らばっていたからである。

これはいろいろおいしかった。

まず、この世界に人がいるとわかったこと。

もう一つは、その死体の装備である。

防具にはところどころに大穴が開いており使い物にはならないが、武器のほうは短剣が一本腰ひもごと落ちていた。

今使っているナイフはネットで手に入れたものだが、使い勝手がよく重宝しているため使い潰したくないのだ。

あとは無傷のブレスレットが一つ。これはよくわからないので、置いておくことにした。

食べ物は主に肉。それも出っ歯ネズミ（これも勝手に名付けた）の肉。

塩も何もないが食うほかない。食えるのは1日目でわかったことだ。火であぶって食べるこの肉はとにかく獣臭く、少し酸っぱい。最悪。

水は川で飲む。

川にいる魚を捕まえようとしているが、なかなかつかまらないほどすばしっこい。

それに角が生えているため、川に少しでも入ると襲ってくる。

今はその角魚（これも以下略）をハントしている真っ最中である。
角魚は時折水面から飛び出す。

それは川の近くに生えている背の高い草についている虫を^{むかい}その角で突き殺し、水面に落としてから食べるためである。

つまり、俺は角魚より早くその虫を見つけた上で、魚が飛び出してきた瞬間に狩りとれる位置にいればいいわけだ。

背の低い木の上に乗る、身を乗り出して待つ。

ゆらあと水面が揺らぎ、その時が来た。

ばちゃっ、水面から飛び出した角魚めがけ、上から短剣を持った腕を振り子のように振るう。

キン、角魚の角にあたってしまったが対象は川の外に出て、ぴちぴち跳ねている。

「よしっ、食糧ゲット！」

思わず木の上でガッツポーズを決める。

何せ久しぶりのまともな食事だ。心躍る。

思わず気が緩んだせいであろう。

幼児程もある巨大なハチに後ろをとられた。

気配を察知する。

前方に自ら転がり落ち、2回転ほどして四足で着地。

腰ひもに差してあった自前のナイフを左手で抜き、背後から巨大ハチが突き出してきた毒針をいなす。
と同時に蹴りを放つが避けられる。

蹴りのせいで巨大ハチとの間に距離が出来た。

眼前に突き出したナイフをひらりと逆手持ちに。
ハチは警戒しているのか近寄ってこない。

だから告げてやる。

「その選択、ミスだよ」

直後そのハチの脳天に短剣が突き刺さった。

走り寄り、短剣の柄を握り振り下ろす。

黄緑の体液を撒き散らしながら、真っ二つになった。

しばらくその死体が動かないのを見てようやく落ち着く。

「背後からこっさり……なんて礼儀知らずだろ」

咄嗟の気転で短剣を放りあげたのは幸いだった。上空……死角へと

短剣を移動させ、あとは落ちてくる場所を影で確認し、そこへ誘導するだけでことは済んだ。

「さてさて、それではお待ちかねのお魚だ」

もうすでに息も絶え絶えな角魚の元へ向かおうとする体を止める。

これだけ長い間放置されていた格好のえさだ。

すでに他の生物が目をつけていてもおかしくない。

そしてその推理は的中した。

木々の奥から道が無理やりこじ開けるような音が響いてくる。

そこから姿を覗かせたのは一匹の赤茶けた巨熊だった。

とんでもなくでかい。五メートルはあろうかという巨大さだ。

今は……無理だ。狩れない。

場所が開け過ぎていて、死角からの攻撃がむずかしい。

さらに気配を消そうにも、たったいまハチを狩ったばかりなので体液が臭いすぎる。

撤退すべきだ。

熊は首をかしげ、辺りを窺っている様だ。

熊が角魚のにおいを確かめるように何度も嗅ぎ、息を吹きかける。すると、魚の表面が……焼けた？

なるほど、こいつだったわけか森の焼けた木の正体は。

二日目、一日目にねぐらを探し出した俺は、火のおこし方と食糧について考えていた。

そんな時、空に煙が立ち上っている場所が見えた。

人かと思って立ち寄ってみると、そこには焼けた木が一本あるだけだった。

その火を種火にして火を得ていたわけだが、おそらく原因はこいつだろう。

熊が魚を食う様を見ていると、殺意が湧いたのでその場を離れることにした。

「いつかその首貰い受ける」

食べ物の恨みは、げに恐ろしいのだ。

13日目 異世界は危険

十三日目、この近辺で俺に敵うものは、初日見た銀狼と巨熊以外いなくなった。

まず、銀狼は初日にしか見かけていない。その銀狼くらいしか、まだ俺の気配を読めていないのだ。

他の生物は俺の存在に気付かないまま殺される。

そうでなくとも、先の二匹以外は正面きって殺せるようになっていく。

そして、今日も食糧を獲りにきた。

あの巨熊に角魚をとられた後、もう一度獲って食べたがネズミより遥かにうまかった。

それ以来、俺の主食は魚になっている。

だが、それにも飽きてきた。

人がいるのもわかったことだし、そろそろ人里に下りる頃なのかもしれない。

そんなことを考え、木の上で気配を殺し寝転がっていると僅かな足音が遠くから聞こえた。

腰ひもから短剣を抜き、中腰に体を起こす。

そして視認した獲物に向かい飛び降りる。

今日は巨牙イノシシが獲物だ。こいつの特徴はその巨大な牙で、巨木すら噛み砕くところ。肉は硬くて食べたもんじゃない。それが五頭。

飛び降りた先で並走していた二頭の首を刎ねる。

そして慣性にとられ走り続ける首なしの体を蹴りつけ跳躍。

後続の三頭がようやくこちらに意識を向ける。

腰ひもに吊ってある角魚の角を左手で抜き、投擲。

三本同時に投げたが、一頭は右目から後頭部まで貫き、残りの二匹は牙で噛み砕き防いだ。

地面に着地する。

すぐさま二頭の双牙が左右から肉薄してくる。

体を捻り進めることで強引に、身体を攻撃範囲外へと抜けさせる。

体の両サイドを走りぬけていくそれぞれのイノシシの脇腹に短剣を突き刺す。

一頭はそれで絶命し、一頭は瀕死になった。

瀕死のイノシシは内臓を傷口から溢しながら、まだ向かってくるが一撃で首を落とし死体を川に蹴り入れる。

刹那

ドツドツドツドツッ！！！！！！！

死体が角につき刺され、ちぎられ解体されていく。
まるで串刺しの刑。数百もの角魚が瞬時に角を突き立てたのだ。

「ドラキュラを思い出すな。伯爵だったか侯爵だったか定かではないが」

となるとこの場合、俺がドラキュラになる訳か。

まあ、そんなことどうだっていいな。

突き立った角が抜ける前にその角を掴み、陸へ引きずりあげ殺す。
角魚が三匹、四匹、五匹。

「痛ッ」

その作業を続けていると、痛みがはしった。

まあ……当然か。

走っているイノシシの首を落とすなんて真似をやったのけたんだ。

手首を痛めるぐらい当たり前の話。

……少し調子に乗っていたのかもしれない。

まだまだ、人里に下りる前に身につける技術は多そうだ。

17日目 異世界は熊が強い

十七日目、火を吐く巨熊を見つけた。

狩り場は上々。手首の怪我はすでに完治。
これを逃す手はない。

今は息をひそめて隙を窺っている。
あと三步で真下、三、二、一！

巨熊が通り過ぎる寸前、木から体を投げ出し力の限り短剣を巨熊の後ろ首に突き入れる。剣先が毛を断ち肉をかきわけ、五センチほど埋まって勢いを失う。

「……おいおい」

キンッ！

その巨体を蹴り飛ばし、距離を稼ぐ。
その際、短剣が半ばほどから折れてしまった。

「不味いな」

「ぎいがががががああああッ！……！！！！！！！！！！」
巨熊が咆哮。

びりびりと大気が震え、空間が軋む。

鼻息荒くこちら（エモノ）を見据える。
口からチロチロと火がもれている。

対してこちらは力を抜き、半ばから折れた短剣を逆手に、左手で腰紐にあるナイフの柄を握る。

巨軀から放たれる鋭い爪。
鈍重そうな見てくれに反し、その一撃はスピードと鋭さを持っている。

バックステップでかわす。

がっ！ ごっ！ ざり！

かわすたび周囲の木々が切り取り削られ、地形が変わっていく。
短剣で伸ばしきった腕を斬りつけるが、嫌な音を残し刃が通らない。

全て紙一重の攻防。
故に体力が徐々にすり減る。

顔前に迫る爪を地面に極限まで伏せることでかわす。

しかし、服が引っかかり投げ飛ばされた。

体勢を空中で立て直し、地面に足をつけるが速度を殺せず大木に叩きつけられる。

「ぐっ！」

頭を揺さぶられたせいで、反応が遅れる。

肺に大気を貯め込むように息を吸う巨熊の姿。
脳裏に浮かぶ死。^{イメージ}

地面から木へと跳躍する。

ゴウツ！！！！

火が噴射された。

次の木へと跳躍する寸前。

足に絡みつくように伸びてきた火炎が見えた。

「なっ！！」

それ自体が意思を持つ生物のように追走してくる。

右足に絡みつこうとするそれを、左手で払いのけた。

激痛。

それは突如として方向を変え、左腕から徐々に肩へと巻きつき侵食してくる。

空中で反転。

即座に巨熊に向かい体を跳ね飛ばせる。

———が、それは空中で死に体をさらした愚行にも等しく。

気がつけば視界は影に覆われていた。

ばきゅっ！！！！

視界が高速でブレ、風景が加速する。

背中でうける木々の感触。跳ねあげられる浮遊感。

それらは同時に激痛を孕み、襲いかかってくる。

重力にとらわれる。

そして知る。自身がもといた地面より下へ下へと落ちていくことに。

朦朧とする中、懐かしい顔がよぎった。

俺が殺した愛しい彼女。

なんで……こいつだけは守ろうって……。

チクリとした疑問。

だが上塗りされる。死が近いせいだろうか。

——俺も……消えられるのか

こんなこと思うなんて。

17日目 異世界は熊が強い（後書き）

感想もらえた。

ヤバい、超絶うれしいんですけど……。

こんな作品ですが、どうぞこれからも見てやって下さい。

17日目続き 主人公瀕死カウンター1

どしゃ、ざああああ

激痛の最中、さらなる激痛により意識が強制的に戻される。

「ぐううっ！」

いまだ右手に握られている折れた短剣を振るう。

たんっ！

宙ぶらりんの状態で体が止まった。

目を開けると、そこは急斜面な坂の中腹辺りだった。

巨熊の平手打ちを空中で食らったため、相当遠くへ飛ばされたらしい。

また、坂を滑り落ちたため、体中を木々によって殴打され、葉によって斬り裂かれたようだ。

しかし……まあ、ひどい有様だ。

左手は見当違いの方向へ向いているし、脇腹も痛いし、頭が朦朧とする。

とりあえず、降りるしかなさそうだ。

そのまま滑り、木を足場に跳躍し降りて行くと森を抜け、整備された道らしきものが見えてきた。

とりあえずその場で自身の状態確認を行う。

巨熊の一撃により、ガードした左手は完全に死んだ。まあもともと重度の火傷を負っていたからくれてやるつもりでガードしたんだが。そして脇腹が痛むと思ったが、どうやら肋骨がイッたらしい。足は両足ともに無事だ。運がいい。

あとは体中に切り傷、擦り傷etc……。頭がグラつく……。まずい。

満身創痍……だな

唾を吐くと血だらけだった。

とりあえず左手に服を裂いた布を巻いておき、森で獲ったツタで体に固定して、道に沿って歩き出す。

しばらく歩くと、遠目から見てもわかるバカでかい城みたいな屋敷が見えた。

だがこっちはそれどころじゃない。どうやら熱が出てきたらしい。傷跡から菌でも入ったのか、それとも折れた骨のせいなのか。どちらにしろ、体を休めないとまずい。

あの屋敷に忍び込んで体を休まさせてもらおう。

上がる息を抑え、気配を隠す。

そして屋敷を偵察すると、正門にそれぞれ顔だけ牛と馬みたいな人間？が二匹。槍を持って突っ立っている。あとは、どでかい外壁がぐるりと囲っている様で入る隙間がない。

というか、このコンディションで外壁をいちいち見て回れるわけがない。

どうしたもんか……。

万年貧乏貴族（前書き）

視点が変わります。

万年貧乏貴族

「たくっ！！！ あんの貧乏公爵、実力も無いくせにウチにつっかかってきて！！！」

「落ち着いてくださいお嬢様。あの豚で憤慨なさるのもムリないですが、問題発言です」

広い一室、その広さから豪華な調度品が窺えると思いきや、その部屋は簡素の一言に尽きた。その部屋には広さと反比例するように、必要最低限の物しかおかれていないだ。

そんなあべこべな部屋から、またしてもあべこべな主従の言葉が響いてくる。

主であろうと推測される娘は端正な顔立ちであり、絹のような金髪にくわえモデルのような体型を有している。もう一方の従者は、ほぼ真白というべき銀髪を後ろで結いあげており、顔立ちは綺麗というより可愛いと言うほうがしっくりくる。主より頭二つ分くらい身長が低い。

だが、主従ともに言えるが間違いなく二人の容姿は出来過ぎである。

その主は豪華なドレスを着て悪態をついており、従者であろう娘も控えめのドレスを着て、自身の主を毒を吐きつつたしなめていた。

「バカみたいに軍をでかくして、ウチに対抗するのは結構ですよ！ええほんとに！！」

「はい」

「ですけど……ですけど!! それで軍の維持費にあっぷあっぷして
いるのはあなたの責任でしょうと私は公言したい!!」

「まさにその通りです……まあ、お金に関してはウチも言えた義理ではないですが……」

「それでどーして、どーしてウチを睨みますか!!」

「やはり、強力な戦力をこちらが有しているからではないかと」

「がるううるるるるるるるるるる」

「どーどーどー」

だがそのおちやらけた掛け合いの最中、一瞬にして主の表情が引き締まる。

「どうなさいました」

自身の主の表情の変化を見、動揺を隠しながら従者は問う。

従者の動揺は当然だ。自身の主がこれほど驚く姿を仕えてから二度ほどしか見たことがない。

「侵入者……しかもどういいうわけだか……第二魔障壁まで突破されて
いる……！」

「なっ!？」

あまりのことに従者から言葉が漏れる。
そんなことが起こる筈がないのだ。

ここが突破されるのだとしたら、王都ですら侵入を許してしまうのではないのか。

そんな疑問すら浮かぶ。

彼女の主人は迅速に動く。

「まずい！！敵がお父様を狙っているのだとしたら、リヒトっ！警備の者を連れてお父様の護衛を、私が侵入者の迎撃にあたります」

「だめです！迎撃には私共で向かいますので……」

従者の言葉も聞かず、主は走り去った。

「猪突猛進過ぎます……！」

従者は悪態をつき、自身もなすべきことをすべく走り出す。

万年貧乏貴族（後書き）

前話から短い続きなっちゃってすいません。

やっと別のキャラを出せた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615ba/>

俺の主人は貧乏貴族

2012年1月12日19時09分発行